

武道教育論における文献学と人類学の融合的アプローチ研究

酒井利信

An integrated philology-anthropology approach to the theory of budo education

SAKAI Toshinobu

武道教育論においては、「実技の他に何を教えるか」ということが重要であり、その内容は武道文化論といわれる武道の文化性に焦点を当てた知見である。

現状では武道文化論に関する新しい知見は、個々に断片的なものが学会に報告されているにすぎず、我々はこれを有効に社会に還元する術をもっていない。

こういった状況を鑑み、本研究においては、武道文化論の全体像を把握し、個々の問題について文献学的に得られた知見を、視覚的に訴えかけることにより教育効果を得ようとするものである。

・文献学的研究成果の整理

従来、武道文化の問題は個々に論じられることがほとんどであり、これを整理して体系づけるような作業はなされてこなかった。ここに本研究のひとつのオリジナリティーがある。

個々の武道文化論を表徴的名称を付して列記すると、以下のようになる。

技術論：武士道論や芸道論の影響をうけた様々な価値観が技術を規定する理論。

用具論：弓矢や刀剣といった武道で使用される用具に対する特別な観念に関する理論。

稽古論：武道における技と心の修練に関する理論。

芸道論：近世以降、茶道や能楽などの影響を受けた武の芸道化に関する理論。

心法論：特に剣術における技術にかかわる精神面の解決方法に関する理論。

身体論：武術に特有の身体感覚にかかわる理論

心身関係論：精神と身体の関わり方、関係の法則などについての理論。

事理論：心身関係論と同意に捉えられる場合もあるが、別に実際の技術と理論の関係についての論であり、大方が修行する際の順序論の傾向が強い。

修行論・修養論：日本古来の神道や仏教の影響を受けて形成された、術を向上させる修行に関する理論と、転じて人間性を向上させる修養に関する理論。

武士道論：中世武士の戦場での行動規範や、近世における主君に対する忠誠を主とする武士道、武士個人の主体的倫理観を主とする士道に関する理論。

修養的剣術論：近代以降の剣術、特に山岡鉄舟に代表される、修養を修行の最終目的とする剣術論。

教育的柔道論：近代以降における、特に嘉納治五郎が創始した講道館柔道が主導する、武道に教育的意義を見出す理論。

呪術宗教的観念論：古代原始宗教の一形式である呪術に武が大きく関わり、祭祀上神聖なものとして刀剣や弓矢を位置づける観念論。

宗教的武道論：複数の武道文化論を包括するものであるが、武道が本来別の文化である宗教と密接にかかわっていくその関係の仕方についての理論。

生涯武道論：全ての武道文化論を包括し、これらの文化性を生涯にわたって実践していくことに意味を見出す理論。

更に武道文化論の全体像を把握するため、上記

